

所在 地 宮城県角田市枝野字郡山、字畠中、字郡、字上沼尻、字品濃

立地環境 角田盆地南東部の阿武隈川右岸の標高 15 ~ 16.5 m の自然堤防上

発見遺構 磁石建物、掘立柱建物、竪穴建物、区画溝、大溝、土坑、瓦廃棄土坑、井戸など

年 代 6 世紀後半 ~ 9 世紀代

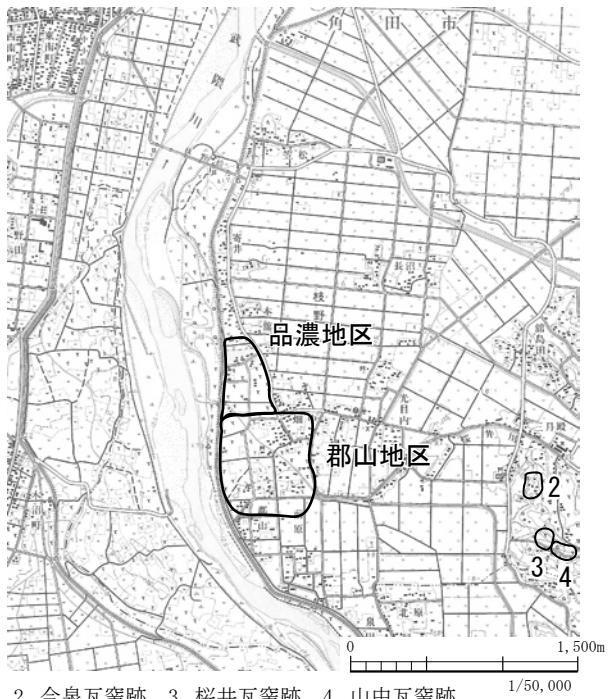
遺跡の概要

角田郡山遺跡は宮城県南部の角田盆地南東部に位置し、北流する阿武隈川右岸の自然堤防上に立地する（第1図）。遺跡は東西 0.6km、南北 0.7km でほぼ方形を呈する郡山地区と北側の品濃地区で構成される。また、東方 1.5km の丘陵上には古代の今泉・桜井・山中瓦窯跡群が分布している。

角田郡山周辺は、近世以前から伊具郡家もしくはその付属寺院の所在地との推測がなされてきた地である。1979（昭和 54）年、圃場整備事業に係る発掘調査を郡山地区で実施したところ、7 世紀末 ~ 8 世紀初頭に遡る建物・遺物が発見され、官衙の正倉の一部である可能性が高いと考えられた。このため、この地区を事業対象地から除外し保存整備して現在に至っている（第2図）。

1991（平成 3）年からは重要遺跡の範囲・内容確認のための国庫補助事業を受け、倉庫群の配置、区画施設の範囲確認を目的とした計画的な調査を継続している。郡庁院・実務官衙域の所在や正倉院北辺の区画施設についてはなお未解明であるが、正倉院南辺から東辺にかけて屈曲しつつ延びる区画溝が 31 次調査区で途切れることができたことから、この付近が正倉院の北辺とする見方がある。また、西辺での区画施設についても未確認であるが、11 次調査区で途切れることができたことから北辺と同様にこの付近が西辺と考えられている。また、44 次から 49 次調査区では堤防際から正倉院方向へと延びる大溝が新たに発見され、川から正倉院へと通する運河状遺構と想定されている。これに従えば、正倉院は東西約 360 m、南北約 200 m の範囲ということになる（角田市 2005・2022）。

正倉院北方の桜井川以北では、品濃地区を主眼において 36 次以降の調査により掘立柱建物群が複数発見されている。品濃地区の建物群に関しては伊具郡家の実務官衙域の候補地としての期待が高まっているが区画施設等は未確認で、年代についても不明な点が多い。同地区の南東に位置する 10・27 次調査区でも掘立柱建物群が発見されているが（第2図建物群①）、これらの建物群については 9 世紀中頃の年代が想定され、有力者居宅に關わる施設である可能性が指摘されている（角田市 2002）。また、10・27 次調査区の北西に位置する 36・37 次調査では床束、間仕切りを持つ掘立柱建物を主屋とした建物群が発見されており、館の可能性が考えられている（第2図建物群②、角田市



第1図 角田郡山遺跡の位置

2009)。これら品濃地区の遺構群については未解明な部分も多いが、伊具郡家館院、有力者居宅等多くの可能性を秘めた地域であることは確かで、今後の調査の進展が待たれる。

以下では郡山地区と、その北方の品濃地区に分けて調査成果の概要をみていく。

1. 郡山地区の変遷

郡山地区で発見された古代の遺構群については、4時期の変遷が考えられている(角田市2022)。堅穴建物群(6世紀後半～7世紀中頃)、正倉Ⅰ期(7世紀末～8世紀初頭)、正倉Ⅱ期(8世紀前半～8世紀中頃)、正倉Ⅲ期(8世紀中頃～後半以降)の4時期である。

堅穴建物群

官衙に先行する堅穴建物群は、後に倉庫群が立ち並ぶ南西部では疎らで、北東部の現住吉神社境内周辺に多くが集中し、集落の中心がこの付近にあったことがわかる。官衙期の遺構保存のために掘り下げたものは多くないが、1次調査SI01、4次調査SI17、6次調査SI27、15次調査SI44、21次調査SI50、24次調査SI57、SI58、SI62、SI63、34次調査SI75、SI81等の出土土器から6世紀後半から官衙造営直前の7世紀中頃にかけての年代幅が想定される。重複する堅穴建物も多く、何時期かの変遷が予想され、古い段階の堅穴建物(SI01・17・27・50・57・75)では火災痕跡がみられる。集落構成については西に20°～50°の傾きをもつ一辺3～8mの方形基調の堅穴建物群で構成され、6次調査SD52や34次調査SD120など古い時期の集落中心部を囲繞した区画溝と想定できるような遺構も存在する。

こうした、北西を基準方位とする集落が、真北を向く官衙造営に先立って展開するという状況は、東北地方南部の官衙遺跡で広く確認されている。集落中心域と後の官衙域の中心が重ならないことも特徴の一つであるが、6世紀後半頃の堅穴建物が主体となるため、集落から官衙に至る変遷に連続性があったのかについては今後検討する必要がある。

官衙期

官衙の建物群については、南西部の正倉域で東西列が3列以上確認されており。その中で掘立柱建物から礎石式建物へ建替え、さらに大型の総柱建物から側柱建物への建替えなどより、3時期の変遷が想定されている(第3図)。

正倉Ⅰ期	掘立柱建物	南列：SB03b・SB04b・SB07b
正倉Ⅱ期	掘立柱建物	中央列：SB02・SB12a 南列：SB03b・SB04b・SB07b 列外：SB11
正倉Ⅲ期	礎石建物+側柱建物	中央列：SB01・SB12b 南列：SB03a・SB04a・SB05・SB07a・SB10 北列：SB06

官衙期に關わる瓦としては、採集品の他4次調査SK40・47出土の瓦(角田市1994・2022)がある。軒丸瓦では複弁蓮華文と素弁蓮華文の2種、軒平瓦では連菱文が1種確認されており、平瓦は粘土板桶巻作りで凸面格子タタキ目のものが主体である。これらの年代は7世紀末～8世紀初頭であることから、正倉Ⅰ期に瓦葺建物があったと考えられる。

正倉Ⅰ期

正倉の遺構として南列に総柱式掘立柱建物がつくられる段階で、7世紀末から8世紀初頭と考えられる。建物の規模は2間×2間、2間×3間、3間×3間程度の規模で、これらの建物群と平行し、約26m離れた位置に南辺の区画施設として溝がつくられる。区画施設の西側は現在の堤防手前で途切れており、西辺は確認されていない(11次調査)。なお、東辺については南列の建物の延長が確認されていないこともありこの段階でⅡ期のように延びていたかについては明確となっていない(角田

市 2022)。しかし、建物は全て礎石建物下で確認していることから、東端の SB10 磂石建物の下に前段階の建物があった可能性があるため、東辺を区画する溝が既に存在していたことも考えられる。

正倉 II 期

南列の掘立柱建物に加え中央列に総柱式掘立柱建物が追加された段階で、年代は 8 世紀前半～半ば頃と考えられる。特に中央列西側に作られた SB12a は 3 間 × 7 間の東西棟で、本遺跡内でも大型の建物である。この建物はその規模等から法倉の可能性が考えられている（角田市 2000・2022）。

この他、南列と中央列の間に西から SB12 方向に延びる溝（SD123）が新たにつくられる。阿武隈川と正倉を結ぶ運河状遺構と考えられる（角田市 2018・2022）。この溝と並行して南北棟掘立柱建物が西につくられる。正倉の建物列から外れる位置であることと建物自体の方向が異なることから管理棟的な建物と考えられる（角田市 2022）。

区画施設である溝は、これまで、建物の延長が未発見なこともあり東辺での延びは曖昧であった（角田市 2022）。しかし本段階で建物自体が中央列に追加配置されたことを考えると、既に東辺にも区画として成立していたことは十分考えられる。

正倉 III 期

中央列の大型総柱掘立柱建物が側柱建物にかわり、南列の掘立柱建物が礎石建物に建て替えられる。中央列と北列にも新たに礎石建物がつくられる段階で、年代は 8 世紀半ば～8 世紀後半頃と考えられる。礎石建物の基礎は掘込地業が主であるが、中央列に新設された SB01 のみ基礎構造が坪地業となっている。大型の SB12 建物は総柱建物から側柱建物へと建て替えられる。なお、SB11 については、柱穴掘方の向きの共通性等から II 期に含めたが、側柱建物であることから III 期に含まれることも考えられる。運河状の溝（SD123）は同位置での掘り直しが行われ存続する。幅は 3.5 ～ 5 m である。前段階での規模が不明だが III 期になって大きく掘り直された可能性がある。

区画施設である溝は東辺も完成し、正倉域北に位置する桜井川手前で収束する。北辺についてはこれまで 16 次調査（角田市 1998）、31 次調査（角田市 2004）、34 次調査（角田市 2005）、35 次調査（角田市 2006）、46 次調査（角田市 2016）において南北方向トレンチでの確認を行ったが北辺を区画とみられる規模の遺構は確認されていない。この結果、北辺については現在の桜井川を区画としていると考えられている（角田市 2022）。

2. 品濃地区の性格

品濃地区はこれまで、統合する以前の角田郡山遺跡北辺を把握する目的で調査を行ってきた。その経過の中で 10・27 次調査区において発見された正倉院北方の掘立柱建物群については土器廃棄土坑出土の土器から 9 世紀中頃の年代が想定され、官衙期とは時期の異なる有力者居宅に関わる建物群であるとの見方が示されている（角田市 2002）。

さらに、品濃地区を主眼において 36 次・37 次調査では床束、間仕切りを持つ掘立柱建物を主屋とし、南北に建物が配置された建物群が発見され、館の可能性が考えられている（第 2 図建物群②、角田市 2009）。これらの他 39 次調査区でも掘立柱建物が発見されているが、周辺で柱筋を揃える建物の存在が確認されていないため時期や性格までは分かっていない（角田市 2010）。しかしその方向性と建替えの有無などにより、36 次・37 次調査により発見された建物群と同時期に存在した建物と考えられている（角田市 2010）。このように品濃地区の建物群に関しては伊具郡家の館院や実務官衙域の候補地としての期待が高まっているが大規模な区画施設等も未確認で、年代についても不明な点が多い。

3. まとめ

角田郡山遺跡の正倉院は南辺と東辺が溝によって区画された範囲に、正倉が整然と配置された部分とその西側に正倉と向きや性格が異なる建物および阿武隈川から正倉院に入り込む運河状の大溝が延びてくるという構成となっている。正倉は、南列、中央列、北列の3列に分かれ、掘立柱建物から礎石建物への変遷が確認されている。

創建当初の正倉は南列に並ぶ小型の総柱掘立柱建物のみで構成されていた。しかしこの段階になり中央にも建物がつくられると様相が大きく変化する。中央列の西端につくられた大型建物がそれである。大型建物と同時に建物付近へと続く運河状の大溝もつくられた時期である。これらの出現は阿武隈川という大河の水運を使った物資の動きが主流となったことを示すものといえる。最終期には建物の増加とともに強固な基礎を持つ礎石式建物に変わる。伊具郡家としての最盛期と考えられる。

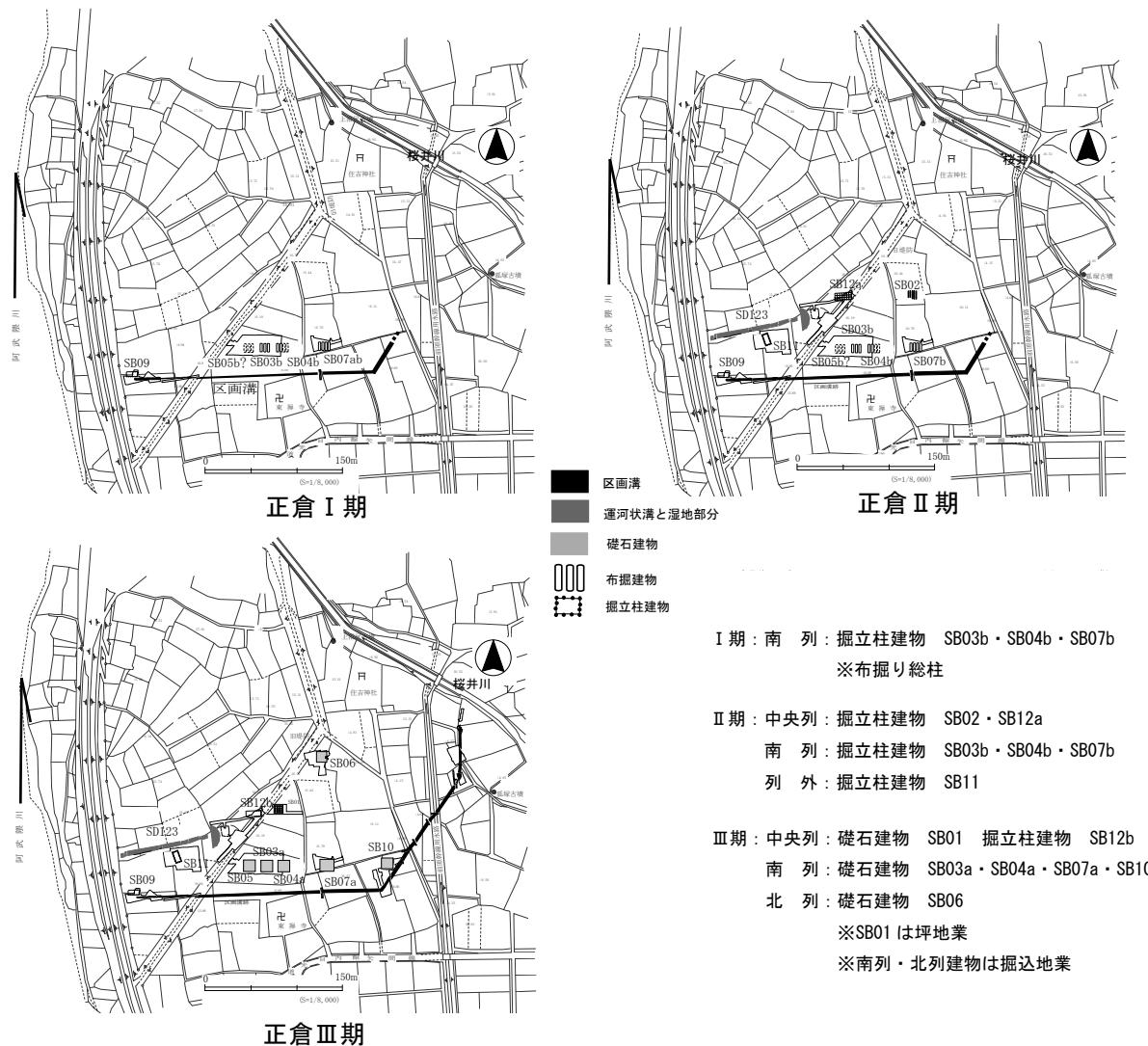
建物の変遷については、掘立柱式から礎石式に変化していくことは他の例とも共通するものである。配置についても東西に並ぶ計画性と共に阿武隈川や旧河道の位置がそこに反映していたことがうかがえる。区画施設としての溝が南辺と東辺のみに存在するのは西に阿武隈川、北に桜井川という地形的な制約があったためと考えられる。

正倉院地区である南に対して、北側に位置する品濃地区については館院や実務官衙域との推定がされてきた。確認されている建物群はある程度のまとまりをもって構成されており、郡山地区で確認されている正倉の建物構成とは明らかに異なるものである。現段階では館や有力者の居宅等の想定がされているが、その場合建物群を区画するであろう施設の有無など未確認な部分が多く、また、郡庁の位置も未発見のため、これらを含め詳細な調査を進めていくことで品濃地区の施設の解明に繋がるものと考えられる。

関連文献

- 伊具郡教育会編 1924 『伊具郡誌』
- 角田市 1984 『角田市史 1 通史編 上』
- 角田市教育委員会 1979 『角田市の古代遺跡』 角田市の文化財第8集
- 角田市教育委員会 1980 『角田郡山遺跡』 角田市文化財調査報告書第3集
- 角田市教育委員会 1993～2006 『角田郡山遺跡 I～XIV』 角田市文化財調査報告書第10・12・15・17・20・22～24・26～31集
- 角田市教育委員会 2007 『市内遺跡発掘調査一角田郡山遺跡・品濃遺跡調査概報』 角田市文化財調査報告書第32集
- 角田市教育委員会 2008 『市内遺跡発掘調査一品濃遺跡調査概報』 角田市文化財調査報告書第34集
- 角田市教育委員会 2009～2018 『市内遺跡発掘調査一角田郡山遺跡調査概報』 角田市文化財調査報告書第35・36・38・40・42・44・45・48・50・52集
- 角田市教育委員会 2009 『角田郡山遺跡』『日本古代の郡衙遺跡』 pp.85-88 雄山閣
- 角田市教育委員会 2022 『角田郡山遺跡－郡山地区総括報告書』 角田市文化財調査報告書第56集
- 木本元治 1996 「東北地方の複弁蓮華文軒丸瓦」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 後藤秀一 2000 「陸奥国南部各郡の資料 伊具郡」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』





第3図 正倉院変遷図 (角田市教委 2022 から作成)

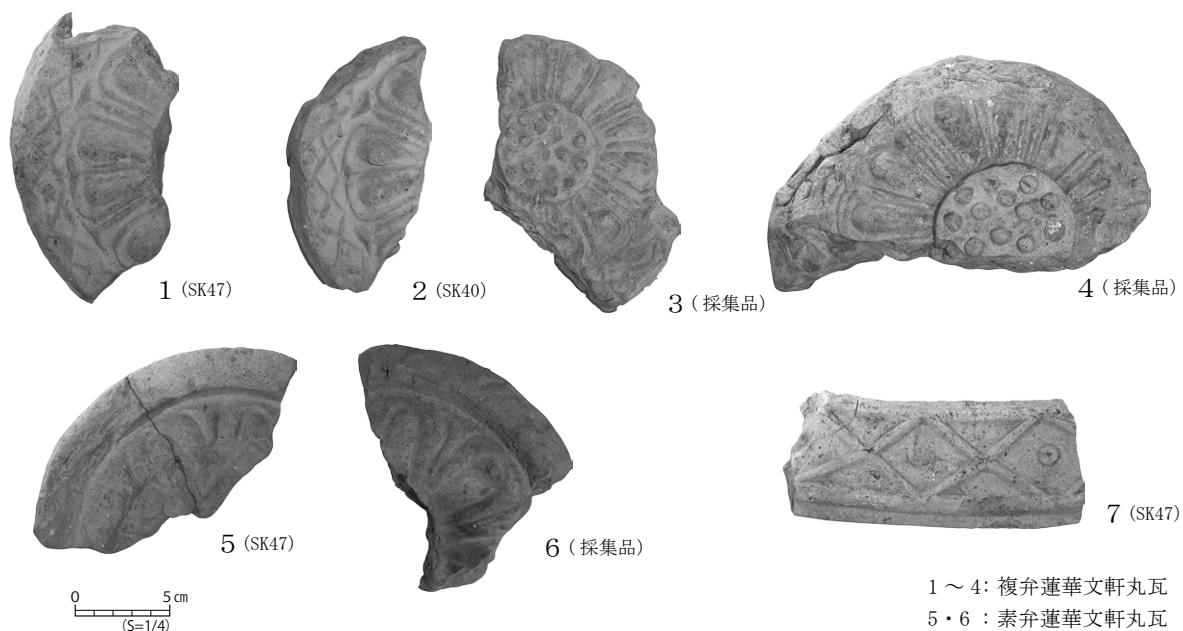


写真1 出土・採集瓦 (角田市教委 2022 から作成)